

若杉隆志（法政大学大原社会問題研究所）

<抄録>

法政大学大原社会問題研究所は、社会・労働問題の研究所であると同時に公開の専門図書館・文書館としても機能している。研究所のWeb-siteでは、ポスター・書簡などの画像資料、非図書資料の内容リスト、刊行物の全文情報などをユーザーの利便性を考えデータベースや一覧リスト、内容を小分けしたファイルなど様々な形式で公開している。主なコンテンツをその考え方とともに述べる。

<キーワード>

社会問題、労働問題、インターネット、デジタルアーカイブ、近現代史料、ポスター、写真、書簡、画像資料、現物

1. はじめに

法政大学大原社会問題研究所のWeb-site（ホームページ）は1996年に開設した。これは法政大学の学内LANが整備され、研究所のLANと接続されるなど環境が整備されたことによって可能となった。Web-site開設の目的は、蔵書検索、新着図書目録、研究会案内などをインターネット上で公開することによって、研究所情報を誰でも、いつでも、どこからでも入手できるようにすることであった。

社会労働関係文献データベース、社会労働関係リンク集は開設時から公開し、改善を加えている。

1999年2月9日の研究所創立80周年を機に「大原デジタルライブラリー」（電子図書館・資料館）としてリニューアルし、ポスター資料全点の画像及び一部画像を含む書簡データベースを公開した。研究所所蔵資料の画像のWeb閲覧・検索、はじめの1歩である。

さらに2003年10月には、「大原デジタルライブラリー」のコンテンツがしだいに増えたことに伴い2度目のリニューアルを行った。「デジタルライブラリー」を図書資料、論文などの文献を「ライブラリー」に、文書資料を「アーカイブス」に、画像資料やネット上の展示を「ミュージアム」にと分散したことが眼目であった。

Web-siteのトップページのURLは、<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp> であるが、利用者の便宜を考え簡略化したURL、<http://oisr.org> でもアクセスできるようにしている。このアドレスは、“Ohara Institute for Social Research”の頭文字“OISR”に“ORG”をつけたものである。また、

Web-siteの名称としても「OISR.ORG（オイサー・オルグ）」としている。

05年8月現在、Web-siteは以下の7つのセクションと、これらのセクションに含まれるファイルすべてを検索できる「全文検索」から構成されている。

1. トップ・総合案内
2. 研究活動・刊行物
3. 大原デジタルライブラリー
4. 大原デジタルアーカイブス
5. 大原デジタルミュージアム
6. 大原社会労働リンク集
7. 英語版

本稿では、図書・逐次刊行物などの印刷形態で発行される以外の資料（研究所では原資料、現物資料と総称している）のインターネット上での公開について、その現状と特徴をざっと概観し、その考え方や今後の課題について述べていきたい。

2. 大原社会問題研究所の所蔵する資料

研究所が所蔵する資料は近現代の社会・労働運動の図書、雑誌、原資料、現物などさまざまな資料である。この時代の資料は戦前期と戦後期ではいくらか様相を異にする。

戦前期は日本の近代化とともに生じたひずみを正そうとする社会運動が高揚する。しかし運動は強権的な国家権力により弾圧され、その資料もまた弾圧や第二次世界大戦に戦火により多くが失われる。現在大原社研にはこうした困難をくぐりぬけた少ない資料が残されている。

また、戦後は民主化の流れの中で労働運動、社会運動が展開されている。その活動は戦前とは比べも

のにならないほど膨大である。運動のあるところでは必ず文書、記録・資料が生まれる。労働運動のみならず農民運動、政治運動、部落解放運動など幅広く社会運動に関する史料を収集した戦前と違い、戦後は労働運動を中心に関連する社会運動に特化してきている。

こうして80年余をかけて収集してきた資料の公開は、デジタル化の流れの中では少数派であった。骨董的な価値や派手さがあるわけではなく、いかにも地味な資料であるからである。

これまで埋もれてきた戦前期の社会運動の資料、また、膨大に存在し、発生しつつある戦後資料へのアクセスをいかに容易にし、多様な形式で公開していくか、これが研究所の課題である。

研究所の所蔵する多様な資料を、研究資源をコンテンツとして公開する。その方法はできるだけユーザーの利便性に着目し、結果としてユーザーの時間を節約する。OISR.ORGの目的はここにある。

3. デジタル・アーカイブの内容

(1) ポスター資料全点の画像公開—公開形式の試行

研究所は現在戦前期の社会・労働運動のポスター類を約2700点、戦後期は約1400点所蔵している。これを利用の便宜を考慮し、いくつかの形式で公開している。

① データベースとして公開

戦前期、戦後期のポスターそれぞれについて検索窓からフリーキーワードを入れて検索するとテキストデータ及びサムネイル画像が表示され、次に、見たい画像をクリックすれば大きく表示される。検索のためのテキストデータやキーワードは独自で入力したものである。業者にデジカメで撮影してもらった画像ファイルにこのテキストデータをリンクさせている。

② スライドショー形式での公開

この戦前期のポスターを主題・内容別に編成し、一覧表からユーザーの求めるテーマをクリックすると8秒間隔で順に自動的に表示していくものである。「OISR.ORG 20世紀ポスター展—戦前期日本における<モダンの力>」と題してネット上で大いにPRし、公開した。もともとの発案はネット事情に詳しく、OISR.ORGでは主にサイトデザインを担当している野村一夫氏（大原社会問題研究所兼任研究員、国学院大学教授）の発案であった。データベースでのフリーワードによる検索は、その前提として研究所がどのようなポスター資料を所蔵しているか、キーワードはどのように付されているかについてある程

度知識がないと効率的な検索ができない、主題・内容ごとに一覧を見せたことで、いわばデータベースというブラックボックスから概要を出してみせたのである。これにより検索エンジンからのアクセスも開けた。

このしかけは一部マスコミにも取りあげられるなど、反響が大きかった。研究所のユーザーは、これまでは、すでに大原社会問題研究所の性格やどんな資料があるのかを知っているユーザーがほとんどであった。この公開以降社会労働問題を専門としないユーザー、研究者、出版社、博物館などからポスターの利用についてのアクセスがくるようになったのである。ネットでの資料公開によりこれまでもその兆候はみえていたが、見せ方の転換が研究所のユーザーの枠をひとつもふたつも超える画期になったといえる。

もちろんこの背景としてポスターそのものもっている資料の力（史料価値、内容、デザイン）があることはいうまでもない。

③ 手動によるスライドショー形式での公開

②の別バージョンである。これもユーザーからの要望がきっかけとなった。「もっとじっくりみたいのに8秒たつと変わってしまう、もういいのに次まで8秒待たなければいけない、なんとかならないか」という声がよせられたことに対応したものである。マイペースでストレスなく見ることができる。これも見せ方の工夫の一つである。

戦前期ポスターは、全点をCD-ROM化し、それを付録とした『ポスターの社会史』を研究所叢書として2001年にひつじ書房より刊行した。これはポスター展のPR企画としてネット上で行った連続解説を編集して1冊の本にまとめあげたものである。さまざまなネット上での公開の試みがアナログの本に行き着いたひとつの事例である。

(2) 戦後資料インデックスシリーズ—とりあえず何があるかを明らかにする

研究所には社会運動・労働運動に関わるさまざまな団体や個人の方からの資料の寄贈が多く、それらはダンボールに詰められたまま長い間放置されていた。一方戦後期資料についての研究者からの公開の要請がしだいに高まってくるようになった。60年代～70年代の三池争議や平和運動、安保闘争、学園紛争などの資料もすでに歴史的史料となろうとしている。研究所はこの解決をデジタルアーカイブに求めた。その前提で資料を並べる書架がまだかろうじて収納の余力があったことによるが。

資料はダンボールから書架に出し、おおまかにファイルや封筒もしくはパンフレットボックスに主題、

年代ごとに配架する。そしてファイルごとにデータ入力し、リストとして公開する、それらを総称してインデックスシリーズとした。資料を1点ごとではなく、くくりとしておおまかどういった資料があるかをとりあえず明らかにしようとするものである。

05年8月現在公開しているインデックスは次のとおりである。

①向坂逸郎文庫原資料インデックス

向坂文庫冊子目録第5分冊『原資料編』のデータファイルをそのまま公開。

②レッドパージ等関係資料

東京電力をはじめ各産業、分野でのレッドパージ関係資料リスト。

③木原実文書インデックス

戦前・戦後にわたり農民運動、社会運動に関わり、1967年から5期衆議院議員（日本社会党）を努めた木原実旧蔵の資料。

④棚橋小虎関係文書

戦前から労働運動、社会運動に参加、戦後は国会議員（日本社会党）、1959年には民主社会党の結成に参加した棚橋小虎関係資料。日記、原稿、著書、書簡、写真、ノートなど。この場合は受贈の際にいただいた文書リストをそのままhtmlファイルにして公開した。

⑤藤林伸治資料

記録映画作家、撮影監督であった藤林伸治が取材・調査の課程で収集した自由民権運動、部落問題、竹久夢二、ジョルジュ・ピゴーに関する資料。

⑥春日庄次郎資料インデックス

戦前・戦後にわたり労働運動、社会運動に関わった春日庄次郎が所蔵していた幅広い社会運動関係資料。共産党、新左翼、個人資料など。

⑦ベルリンの壁崩壊当時の旧東ドイツの新聞、書籍類

内容は新聞、図書なのであるが、コレクションとしての塊を尊重し、インデックスシリーズのひとつとして公開した。

⑧平和・原水爆禁止運動、原爆被爆者問題資料

原水協の役員を務めた田沼肇の旧蔵資料に、もともと研究所が所蔵していた平和運動関係資料を加え、まとめたリスト。

⑨下坂正英資料インデックス

戦前期から農民運動、部落解放運動、に活動した下坂正英が所蔵していた主に戦後期の社会運動の資料リスト。

これらのインデックスはいずれ一括されたデータベースと公開されることになるだろう。当面は優

先順を決めながらともかくも利用可能な状態にし、リスト公開をすることを行っている。

(3) 資料類の公開方法ーインデックスシリーズの別バージョン

広い意味ではインデックスシリーズなのであるが、コレクションの内容・性格・資料整理の経緯から単にリストとしてではなく、さまざまな公開形式を工夫している戦前期原資料、協調会史料、産別会議資料、現物資料の4つのコレクションについて紹介したい。

①戦前期原資料ー多様な検索カードを一括データベース化

研究所が所蔵する戦前期の労働運動、農民運動、社会運動資料を一括してデータベース化したもので、検索窓にフリーワードを入れて検索する方法と「リストアップ版」からラジオボタンをマークして検索する方法とを用意している。一覧リストから検索できるようにしたのはポスターの公開方法同様、データベースでの検索のみではなにかがあるかが一般ユーザーにはわかりにくいだろうことを考えてのことである。

ところで、最初に紹介したポスターも含め、戦前期の資料は研究所の所蔵資料の核であり、利用もかなりの割合を占める。大正8年の創立以来さまざまな社会運動団体や個人から購入により収集してきたもので、大阪から東京への移転（昭和13年）、東京大空襲（昭和20年）を経て今日に至っている。量的にはそう多くはないが、それぞれ1枚、1点が研究所にとって貴重史料である。その一部は自治体史の編纂事業に提供し、文書館に複製が作成され公開されている史料もある。

史料はグループ単位で封筒に入れ、ファイルしている。この史料群はこれまでさまざまな検索ニーズの応え、検索カードを作成してきた。「資料内容」「団体名索引」「争議名索引」「事件名索引」「裁判人名カード」「ポスター検索カード」などである。データ自体は資料1点ごとではないが、資料のもっている情報を抽出し、カード化してきたものである。これらの検索カードをすべて市販のデータベースソフトにより入力し、データベース化して検索できるようにしたものである。この点が戦後資料とは決定的に異なる。

近年労働組合運動の衰退が言われて久しい。しかし、戦前期には20万から40万人程度であった組合員数は今日1千万人を超えている。活動に伴い発生する資料もケタ違いに多い。戦後資料に戦前史料と同じ整理レベルを求めるのは現状では無理がある。

②協調会史料ーマイクロからデジタル化し全文公

開

協働会は、第一次世界大戦後の労働運動の昂揚を受け、労使協働を目的として1919年に設立された団体である。社会政策・社会運動の調査研究、社会政策推進、労働争議の仲裁・和解など多岐にわたって活動し、膨大な調査研究資料を残した。その図書資料は中央労働学園を経て法政大学大原社会問題研究所に引き継がれ、その後収集した原資料とともに大原社研が一括して管理運用している。それら資料は、内務省資料と比較してもより詳細な調査・分析に及んでおり、大正から昭和初期の社会労働運動の動向を知るには不可欠のコレクションといえる。

現在インデックスとしてpdf ファイルを全文を公開しているのは、柏書房より2000年に発行した『協働会資料 日本社会運動資料集成－1920年代～1930年代』のマイクロフィルム全76000ファイルである。発行後数年を経て版元と合意の上で公開した。現在マイクロ版として第2期が発売されている。いずれこれらも全文公開できるよう準備をすすめているところである。

③産別会議資料－アナログで複製作成中

産別会議は戦後初期に活動した労働組合のナショナルセンターである。全国、全産業にわたり影響を及ぼしたその活動とその資料は様々な分野から戦後初期の研究に注目されているところである。利用頻度もかなり高い。一方資料は当時の紙事情の故にきわめて状態が悪い。コピーをするのも躊躇するくらいである。その対応を検討した結果、コピーの請求のある都度そのファイルごとコピーをもう1部作成し、その後の利用は複製を利用してもらうようにしている。いずれ閲覧用のコピーが1セットそろわずである。マイクロ化の予算措置がかなわなかったこと、デジカメ撮影に要する手間・コストを考慮してのことである。

インデックスにはファイル単位でリストを公開し、あわせて「産別会議旧蔵パンフレット」のコーナーではパンフレットの表紙画像257点を公開している。

④現物資料一覧－デジカメ撮影し一覧表とデータベースで公開

研究所で現物資料と称しているのは旗、バッジ、看板など、要するに「もの資料」である。ポスター、写真も広い意味では現物資料であるが量とユニークさから別立てで公開している。これも一覧表からたどっていく方法とデータベースの検索窓から表示させる方法とを併用公開している。現物資料については簡単な英訳を付している。

(4) 英語サイト

英語版は、日本語サイトと同じく1996年12月に

開設した。日本の社会・労働問題に関心を持っているが日本語を読むことができない研究者やユーザーに研究所のリソースや日本国内の他のリソースを紹介することが目的である。

内容は、研究所の歴史、出版物紹介、利用案内、研究員・職員紹介、日本国内の社会・労働関係英文サイトへのリンク週、ポスター画像のスライド展示、所蔵貴重書・書簡のオンライン展示、所蔵欧文文献のオンライン検索などである。また、研究者の便宜をはかるために、日本の労働問題・労使関係に関する英文文献リスト（図書・論文）も掲載している。

日本語のページに比べると内容があまり充実していないのが現状である。しかし、インターネットの普及により学術研究の国際化がすすむなかで、研究所のリソースを言葉の壁を克服して海外に積極的に発信していくことが要請されている。

最近では戦前ポスター・戦後ポスターをテーマごとに載せた。この後戦前ポスターのデータベースを公開する予定である。

(5) 刊行物－内容情報を切り分け発信

Web-site 開設当初は刊行物の紹介が主な内容であったが、刊行物の全文掲載、さらに内容情報を主体にした公開と多様な展開を試みている。

①『日本労働年鑑』－全文電子化から

研究所創立の1919年に第1集を刊行して以来戦時中の中断をはさみ現在76集に至っている研究所の研究・出版活動のメインとなる事業である。市販していることもあって出版社と協議しながら刊行年の比較的古いものから順次電子化し公開している。当初はテキストデータとしてそのまま公開していたのであるが、途中からデータのオーサリングをやり直した。これはファイルが長大になるため全文検索した際にどこに該当データがあるのかがわかりにくいためである。イメージとしては年鑑の内容を小項目ごとに「カード化」するものである。書籍の利用形式に対し、Webでの利用は概して断片的であり、通読する仕様よりは検索しやすい仕様の方がユーザーの利益になると判断してのことである。

②「大原社会問題研究所雑誌」－pdf ファイルでそのまま公開

『日本労働年鑑』と並ぶ研究所のメインといえる刊行物で月刊の労働問題の専門雑誌である。2001年4月号よりpdfファイルで公開している。これも市販していることから発売元と協議の上次の号の発行後に公開している。全文公開による定期購読者の減少対策として研究所資料の利用上の特典を用意した。当初心配したほどには定期購読は減っていない。従

来の紙媒体の利用とネットでの閲覧とはイコールではないということであろうか。

③『大原社会問題研究所五十年史』——オンデマンド出版の試行

1970年に非売品として発行した研究所の「正史」であるが、すでに在庫がないことからデジタル化してOISR.ORGで公開した。さらに業者と契約し、オンデマンド出版を行った。年に数冊は売れているようである。学術書の出版のひとつの形として試みたものである。

④『社会・労働運動大年表』

1987年に発行し、95年にその後を増補し改定発行した図書である。近現代の社会運動・労働運動の動きを年表でたどり、重要事項に解説を付した図書である。ネットでは年表の解説を「労働クロニカ」として公開した。現在これをデータベースとして公開し、検索できるようにする計画が進行中である。

もともとは図書の内容をデジタル化したものであるが、その公開形式は図書とはまったく別のもの、すなわちより事典の性格に適したデータベースとして社会・労働問題の研究・教育に寄与できるものとなるだろう。

以上 OISR.ORG のコンテンツからいくつかのページをその公開の考え方もまじえながら紹介してきた。このほかにも紹介したいページはあるが紙幅の関係でこのあたりでとどめたい。関心のある方はぜひ一度“OISR.ORG”のさまざまなページにアクセスしてほしい。

4. OISR.ORG の考え方、今後の展開など

最後に、OISR.ORG について研究所としての考え方、今後の展開などをまとめてみたい。(1) 公開性——インターネットをカウンターに

これまで記したように OISR.ORG は社会問題、労働問題に関心を持つ研究者、ユーザーに研究所の所蔵している資源を公開していく、その手段としてインターネットを活用していこうとするものである。ネットの資源は所蔵資料は当然のこととして、出版活動、研究活動も含めトータルとしての研究所の活動の発信である。そのことをとおして研究所の諸活動に対する批判も受けしながら、結果として労働問題・社会問題研究の発展、展開に貢献したいと考えている。

かつて都心にあった研究所が東京の郊外に移転したため来所が不便になったこと、さらに学内での研究所の存在が埋もれがちなことへの対応を模索している時が、たまたまインターネット時代の開幕とシ

ンクロしたため、この分野では他の機関に先んじた形になっているが、今日ではより積極的な意義を見いだしている。

(2) 検索可能性の追求——検索されなければ意味がない

公開方法をさまざまに工夫しているといっても基本的にはいずれもシンプルなものである。あえてファイルを小分けしているのは一般の検索サイトを意識してのことである。また、データベースの検索窓はきわめてシンプルである。

このシンプルさは実はマシン・マンパワーの限界による。そういう限界があるからこそ一般の検索エンジンなどでの検索可能性を高める努力をしているところである。

(3) コンテンツの重視——資料を埋もれさせない

社会・労働問題の専門研究所のコンテンツとしてふさわしいものを提供する。研究所の膨大な資料およびコンテンツを広く世界の研究者に利用していただけるよう、創意工夫して公開の努力をする。英語版を充実して国際的利用に耐えるものに強化する。技術的に困難なコンテンツの公開に際しても最大限の努力をする。

もともと予算規模の小さな研究所であるが、これまで経常経費や学外からの助成金は基本的にコンテンツの拡充にあててきた。検索カードのデータベース化、ポスターや書簡、写真、現物のデジタル撮影などである。もっているネタ(資料、カード、資源)はすべてネットに載せる、これが研究所の方針である。

公開した後のページのメンテナンス、マシン環境・パワーの問題、予算配分や人員措置などなど問題は山積しているが、収集した資料を埋もれさせず、社会にオープンにしていこうために努力していきたい。

参考文献

- 1) 若杉隆志. 法政大学大原社会問題研究所におけるOISR.ORG構築の取り組み. 情報の科学と技術. 53巻12号. 2003. p. 593-597.
- 2) 野村一夫. デジタル・アーカイブの冗長性とオープン性: 大原社研での公開作業をめぐって. Computer & Education. vol.18. 2005. p. 21-26.